

発展的な学習 アジアの民族運動

第一次世界大戦で同盟国側が敗れると、これらの国々に支配されていた民族は、独立運動をおこしました。ウィルソンは、民族の自決を唱えて、この動きを支持し、東ヨーロッパでは、ポーランド、チェコスロバキアなどが独立しました。このような動きにうながされて、東アジアの朝鮮や中国ばかりでなく、東南アジアや南アジア、西アジアの諸民族も、独立運動をおこしました。



東南アジアの民族運動

東南アジアは、16世紀以後、この地方の豊かな資源をめくり、オランダ・イギリス・フランス・アメリカなどが争い、タイをのぞく大部分の地域がそれらの国々の植民地とされました。

アメリカ領となったフィリピンでは、アギナルドらの独立を望む運動が続き、1935年ケソン大統領のもとに独立準備政府ができました。

フランスは、インドシナを植民地にして、同化政策によって支配をはじめました。これは住民の反感をかい、まもなく種々の同化政策を改め、インドシナ人が公職につくことも認めました。その後、自治独立の運動がおこり、第一次世界大戦後、この運動はますます強くなりました。

ジャムは、国王のもとで独立を保っていました。第一次世界大戦後、国際的な地位が高まり、1925年には、欧米諸国と新条約を結び、司法や関税などの権利をとりもどしました。1932年、若手官僚によるクーデターで、立憲君主国

となると、近代国家の建設をめざし、1938年には国名をタイに改めました。

1886年にイギリスの植民地となったビルマは、インド総督によって支配されました。ビルマ人は、これを好まず、熱心に自治とインドからの分離を求めました。そこで、イギリスは、1923年、ひとまず強い権限をもつ知事の統制のもとに立法議会をおくことを許し、参政権をあたえました。さらにその後、1937年には、イギリス総督のもとにビルマ人内閣をつくらせました。

インドネシアでは、20世紀にはいると、民族的な自覚による運動がおこり、大戦後は民族運動となって広がりました。1927年、自治・独立を求める民族政治団体連盟、その他の政党が生まれ、オランダの政府は、国民協議会をつくり、しだいに住民の政治的地位を認めました。

南アジアの民族運動

イギリスの植民地となっていたインドは、戦争が終われば自治を認めるというイギリスの約束で、多くの兵士や物資をヨーロッパに送って



●チャルカ(糸車)を回すガンジー チャルカは、ガンジーの提唱したスワデシ(国産品愛用)運動の象徴でした。

協力しました。しかし、イギリスは自治をあたえず、弾圧を強化したので、民衆の不満は、戦後におこった民族自決主義と結びついて、大きな民族運動となりました。指導者としてガンジーは、イギリスの支配に対して、無抵抗・非暴力主義を唱えたほか、さらに、インドの統一をさまたげている宗教・人種・党派・階層の問題をとり上げ、それらの争いや差別を少なくし、全インドを結合させるために努力しました。ついでガンジーとネルの指導のブルナースワラジ「完全独立」が叫ばれるなど、自治独立の運動はますます広がり、このような情勢のうちに、イギリスとインドのあいだにしばしば会議がおこなわれました。イギリスは1935年改正インド統治法を公布して、一部の自治権を許したものの、真の自治・独立は達成されませんでした。

西アジア諸国の民族運動

西アジアは、ヨーロッパとアフリカの両大陸に接し、交通のうえで重要な位置にあたり、この地域も長いあいだ、ヨーロッパ諸国の政治的な力におされてきました。

第一次世界大戦で敗北したトルコは、戦後におこった民族自決運動のため、領内のシリア・パレスチナ・メソポタミアなどがはなれました。さらに、1920年に連合国におしつけられた条約で、トルコの領土は、小アジアとヨーロッパの一部分とされ、重い賠償の義務を負わされ、外



●トルコの文字改革 「トルコの父」ケマル＝パシャは、国字のローマ字化をはかり、その普及に努めました。

国の圧迫も強くなりました。こうしたとき、ケマル＝パシャ(のちのケマル＝アタチュルク)が出て、平等的な条約に賛成した民衆とともに立ち上がり、国民党を率いて革命をおこし、スルタン＝カリフ制を廃止しました(オスマン＝トルコの滅亡)。新生トルコは1923年、連合国と結んだ条約を改訂して対等な条約を結び、大戦前とほぼ同様の領土を回復し、治外法権も撤廃して完全な独立国となりました。首都もイスタンブールからアンカラに変え、共和国を宣言しました。ケマルは選ばれて初代大統領となり、独裁的な権力をもってイスラム教の非国教化、文字の改革、婦人解放など多くの改革をおこない、トルコは近代国家建設に向かいました。

アフガニスタンでも、民族自決の運動がおこり、1919年、ついにイギリスから独立しました。



●解放前のトルコ婦人 婦人解放により、ベールの禁止、一夫一婦制の確立などが実現されました。

もっと知りたい アジアの民族運動

第一次世界大戦で同盟国側が敗れると、これらの国々に支配されていた民族は、独立運動をおこしました。ウィルソンは、民族の自決を唱えて、この動きを支持し、東ヨーロッパでは、ポーランド、チェコスロバキアなどが独立しました。このような動きにうながされて、東アジアの朝鮮や中国ばかりでなく、東南アジアや南アジア、西アジアの諸民族も、独立運動をおこしました。



東南アジアの民族運動

東南アジアは、16世紀以後、この地方の豊かな資源をめくり、オランダ・イギリス・フランス・アメリカなどが争い、タイをのぞく大部分の地域がそれらの国々の植民地とされました。

アメリカ領となったフィリピンでは、アギナルドらの独立を望む運動が続き、1935年ケソン大統領のもとに独立準備政府ができました。

フランスは、インドシナを植民地にして、同化政策によって支配をはじめました。これは住民の反感をかい、まもなく種々の同化政策を改め、インドシナ人が公職につくことも認めました。その後、自治独立の運動がおこり、第一次世界大戦後、この運動はますます強くなりました。

ジャムは、苦しいながら国王のもとで独立を保っていましたが、大戦後に国際的な地位が高まると、欧米諸国と新条約を結んで、関税などの権利をとりもどしました。1932年、若手官僚によるクーデターで、立憲君主国となると、近

代国家の建設をめざし、1939年には国名をタイに改めました。

1886年にイギリスの植民地となったビルマは、インド総督によって支配されました。ビルマ人は、これを好まず、熱心に自治とインドからの分離を求めました。そこで、イギリスは、1923年、ひとまず強い権限をもつ知事の統制のもとに立法議会をおくことを許し、参政権をあたえました。さらにその後、1937年には、イギリス総督のもとにビルマ人内閣をつくらせました。

オランダに支配されていたインドネシアでは、20世紀に入ると、インドネシア人の民族的な自覚がおこり、民族主義的な機関紙や雑誌も発行されました。大戦後は民族運動が盛んされ、スカルノは、1927年に、インドネシア国民同盟を設立させ、独立を達成しようとしていました。

南アジアの民族運動

イギリスの植民地となっていたインドは、戦争が終われば自治を認めるというイギリスの約束で、多くの兵士や物資をヨーロッパに送って



●チャルカ(糸車)を回すガンジー チャルカは、ガンジーの提唱したスワデシ(国産品愛用)運動の象徴でした。

協力しました。しかし、イギリスは自治をあたえず、弾圧を強化したので、民衆の不満は、戦後におこった民族自決主義と結びついて、大きな民族運動となりました。指導者としてガンジーは、イギリスの支配に対して、無抵抗・非暴力・不服従を唱えたほか、さらに、インドの統一をさまたげている宗教・人種・党派・階層の問題をとり上げ、それらの争いや差別を少なくし、全インドを結合させるために努力しました。ついでガンジーとネルの指導のブルナースワラジ「完全独立」が叫ばれるなど、自治独立の運動はますます広がり、このような情勢のうちに、イギリスとインドのあいだにしばしば会議がおこなわれました。イギリスは1935年改正インド統治法を公布して、一部の自治権を許したものの、真の自治・独立は達成されませんでした。

西アジア諸国の民族運動

西アジアは、ヨーロッパとアフリカの両大陸に接し、交通のうえで重要な位置にあたり、この地域も長いあいだ、ヨーロッパ諸国の政治的な力におされてきました。

地中海の東側を中心とする地域は、16世紀以降、オスマン帝国(トルコ)が支配していました。第一次世界大戦がおこると、トルコは、ドイツ側になって参戦しました。これに敗れて1920年に結んだ条約によって、領土は小アジアとヨーロッパの一部分に縮小されることになりました。そして、外国からの圧迫も強くなっていきまし



●トルコの文字改革 ケマル＝パシャは、アラビア文字をやめローマ字化の普及に努めました。

た。こうしたとき、ケマル＝パシャ(のちのケマル＝アタチュルク)が出て、進軍してきたギリシャと戦って領土の一部を回復し、ついで君主制を廃止し、共和国を樹立しました。また、連合国とのあいだに新たに条約を結び、新しい国境を画定するとともに、治外法権の撤廃にも成功しました。

初代大統領に選ばれたケマルは、憲法を公布し、政教分離や婦人参政権を実施するとともに、文字の改革などにもとり組み、トルコを近代国家へと導きました。

アフガニスタンでも、民族自決の運動がおこり、1919年、ついにイギリスから独立しました。



●解放前のトルコ婦人 婦人解放により、ベールの禁止、一夫一婦制の確立などが実現されました。